



宮坂 静生薦 岳 6 月

桃の花旅の荷物に兎の御虎子
根開きや根曲がり山毛櫟に力噴く
舍利弗の首傾げをり春の奈良
画材屋は鰐の寝床ミモザ咲く
いまだからわらつていへる桜餅
早春の感情的な温度計
干拓地四月の雪の氣怠さう
啓蟄や湯槽にあまた屑林檎
喰積や七十年前吾ありき
春蘭や頑張らずとも諦めず
吾が終は猛者であるべし雪解川
吾から吾の少しずれゐるさくらどき
霜柱なせか根拠のない自信
トラクターの肩身のせまき春の道
今あるを感謝の気持笹起きる
花びらの陰は青めきいたりけり

國家衰退たんぼを侮れば
堅雪を朱に芽鱗のおびただし
木の根明く土は地球の語り部よ
被曝者はわたし最後に春の濤
茅花野に水の盈ちゆく相模かな
中空に鳥の集まる卒業歌
花嫁を迎へ長芋春掘りす
花冷や棒に捩りて藍搾る
うすらひは鳥天狗の涙とも
春泥や己が重みに豚立てず
嚴あればのぼる男よ花辛夷
卒業といふ躍り場のやうなもの
嫁ぎ来て初めて畦を塗りをりぬ

長尾裕美子 柚木幸子 伊藤木公子 浜溝玲子 中溝玲子
島形英美子 智子 菅原砂登子 龍治 高橋治
高橋龍治 菅原砂登子 沢山登子 住吉道子 住吉道子
若槻竹子 斗南子 里洋子 桜井洋子 里洋子
高橋洋子 里洋子 田中利子 田中利子 田中利子
小熊橋子 里洋子 田中利子 里洋子 田中利子
小熊橋子 里洋子 田中利子 里洋子 田中利子
大窪松子 里洋子 田中利子 里洋子 田中利子
飯田嘉子 里洋子 田中利子 里洋子 田中利子
瀬都嘉子 里洋子 田中利子 里洋子 田中利子
百瀬政子 里洋子 田中利子 里洋子 田中利子

奥山源丘 幹自聲 真榮城いさを
清水逍徑 満田光生 有手勉
川村五子 関千賀子 大野今朝子
田中純子 須瀬戸柚月 二階堂なつみ
尾口博子 阿部郁恵

岳半世紀へ・拓くことば

六月 (466)

宮坂 静生

はじめに。みんな最高に輝いていた。一つの目標をやりとげる精神のかがやきほど美しいものはない。ふたたびはあり得ない一期一会の、一語一會のすばらしい時間を共有してくださった方々に、この選評の場をお藉りして心からお礼を申し上げたい。もう次の旅立ちがはじまっている。深い余韻をもつて。

芽鱗とは珍しいことば

堅雪を朱に芽鱗のおびただし 幹 自聲

芽鱗とは樹木の冬芽を包んでいる鱗状の苞のこと。気に入ることころを的確にいい得た植物学の用語。春先の堅雪の上に朱の芽鱗がびっしりと落ちている光景。目が効いている。心の弾みも伝わる。早春とは芽が苞をぬぐ躍動のとき。佳句。

海境の南十字星に遊ぶべし 真榮城いさを

宮古島在住の作者。南十字星が海境にかがやく。この光景を思い描くだけで私の胸は踊る。十字の語を含む南十字星を南半球のパースで堪能してから、私は南十字星幻想に囚われている。海境とは海の果てにあると信じていた海神の国

(異郷)との境。沖縄人の信仰心を秘めた作として、黄泉への親愛の情を感じさせる。

木の根明く土は地球の語り部よ 清水 道徑

春先の雪解「木の根明く」の例句が殖えている。うれしいと思う。すべての季語の母語のような存在の季節のことば。土こそ地球の秘密をあかす語り部とはその通りであろう。雪が溶け地面の土が見え出す。その一事に春の連想が拡がる。雪深い新潟県三条在住だけに、実感が籠っている。

被曝者はわたし最後に春の濤満田 光生

「被曝」は放射能を浴びること。フクシマ原発事故の被曝を念頭にした作。春の大平原の波濤を見ながら祈る思いをとした作。人類が平和を願い開発した自然界の鉱物資源からフルトニウムなどの核分裂性物質が作り出され、人類を破滅に落し入れるとはこの上なく怖ろしい。自然に哀訴しているような下五音がいい。

茅花野に水の盈ちゆく相模かな 有手 勉

俳句における万葉調。「茅花抜く浅茅が原のつぼすみれい

ま盛りなり吾が恋ふらくは」(「万葉集」巻八)を思い起こそ。ちがやの花が咲き水がゆきわたる相模大野のゆたかな春が目に浮かぶ。人事句ばかりでなく堂々たる風景句を作り、深呼吸をすることは、人間を大きくする。愛誦したい佳句。

中空に鳥の集まる卒業歌 川村 五子

中空とは空中。鳶など宙に飛翔している群鳥のさまを捉え、卒業し旅立つ若者への祝句とした。一読して気分爽快の作。ちまちました句にも佳句はあるうが、このような大らかな作をときどき作りたいと思う。若き日への憧れもある。

花嫁を迎へ長芋春掘りす 田中 純子

北信の川中島から松代にかけ、千曲川の砂地一帯は長芋(とろろ芋)の産地。農家で花嫁を迎える。折から春掘りの長芋をたんねんに掘る。ことがらとは直接関連がないが、明るい句だ。よろこびが溢れている。生活感がある。

花冷や棒に振りて藍搾る 大野今朝子

藍染工房の藍を搾る作業過程での花冷がいい。情緒を表面に出さないで、労働さなかの体感の一つが花冷。こんな花冷は珍しい。藍工房での作業を的確に捉えているところ、花冷を情に流さないで手堅く感じさせる。作者の意欲的な姿勢が描き出されている。

國家衰退たんぽぽを侮れば 奥山 源丘

「岳」四十周年記念大会で詩人のアーサー・ビナードさんが、日本の現況は「國残りて山河亡ぶ」ではないかと巧いことをいわれた。共感する。掲句は丁度逆のことを行っているが、同じことである。たかがたんぽぽと自然破壊を平氣でいると、結局は国家も衰退に向う。日本たんぽぽは絶滅。外来種ばかり。一事が万事。原子核爆発が身近な生活を破壊する時代になってくると、国も個人も生きる哲学を持たねばならない。

今月の秀句

春泥や己が重みに豚立てず 二階堂なつみ

拓くことば ④1 自句寸言句 「子どものこゑ」

草引くと子どものこゑが地中より 平成元年

「岳」（平成元年六月号）所載。「浦上爆心地」と前書きつく。「長崎の松山町よ鎧壳」も同時作。長崎は敗戦の年の八月九日プルトニウム弾が投下され、およそ七万四千人が死去。老婆が爆心地浦上の公園で草を引いていた。私は自分が老婆と一緒に地になってしまった思いで傍らにいた。草を引くごとに地中から無邪気な子の声が聞こえる。夕暮れ。爆死した子どもの魂はなんとも切ない。『火に椿』所収。

もう誰の魂とも知れず流灯よ 平成元年

「岳」（平成元年九月号）所載。佐渡小木燈籠流し詠。八月十八日。同時詠「水中に流燈の尾のごときもの」「流燈の消えてしばらく見ゆるもの」。小さい港を舟で沖合に出て流す。流人の島の盆、暗い蠟燭の火。『火に椿』所収。

律といふ子規の妹木の実降る 平成元年

「鷹」（平成元年十二月号）所載。湘子推薦句。「鷹」へ昭和六十年一月から平成五年三月まで「子規秀句」を毎月連載。九年間、九七回。三歳違いの妹律がいなけれ

ときにはユーモラスな句を作る作者。肥えすぎた豚が立たないという。春泥に滑って足場の自由が効かないものか。大胆に豚に着目したのが作句への自信を思わせる。おもしろい。即物的で情を入れない。女性の俳句としては珍しい。

巖あればのぼる男よ花辛夷瀬戸袖月

春早く辛夷が咲く。そんな頃に巖登りをする寡黙な男のひたむきな生き方を感じさせ、惹かれた。あえて困難なことに挑戦しようとする、心理詠でもあるうか。

卒業といふ躍り場のやうなもの 阿部郁恵

比喩が巧い。卒業は次へのステップ。階段の躍り場を想定したやさしさは、詠み手の人柄を思わせる。小学生などへの俳句指南をしている作者らしい心遣いの一旬。

嫁ぎ来て初めて畦を塗りをりぬ 尾口博子

ういういしい。農家へ嫁ぎ、畦塗りをする。田を作るはじめの作業を教えられたながら挑戦している都会育ちのお嫁さんとのまどいや一生懸命さが見えるようだ。本人の立場ではなく、家人の目から温かく見守っている作。畦塗りへの着眼が秀逸。

根開きとは地貌季語の原点にあたることば

ば子規は世に存在できないほど、兄妹は関わりが深い。木の実降る秋の感慨。律は二十六歳から三十三歳まで七年間介護。子規の死去の翌年共立女子職業学校本科に入り、さらに補修科を終え、母校の事務員、裁縫教師を二年も務める。キャリア・ウーマンの走りであった。『火に椿』所収。

歳月のくらき坂より初音売 平成二年

「鷹」（平成二年四月号）所載。松本の正月は元日の晩から。四時頃には初音売がくる。ピィーピィー鳴らし、「初音」「初音」とぶつきらぼうに唱える。自転車の前籠に初音笛を入れ売っていた。しない商売。もう初音売は来なくなつた。父母の時代のものか。『火に椿』所収。山始杉の挿し穂の明らめり 平成二年

「鷹」（平成二年四月号）所載。湘子推薦句。同時作「剪定枝束ねて色の濃かりけり」。正月十一日、山始は初山ともいう。安曇野の杉苗畑は、雪で挿穂が赤茶けていた。『火に椿』所収。

涙槃図に泣き声を描き忘れけり 平成二年

「俳句」（平成二年五月号）所載。五十代特集。京都の三千院であったか。立派な涙槃図だが、泣き声がない。泣きまねだけ。評判になつた汎用句。『火に椿』所収。

根開きや根曲がり山毛櫟に力噴く 杠木幸子

ごつごつした一句であるが、これぞ「根開き」の代表句。北越後、福島県近い雪深い地に在住の作者。春先の雪根開きほど待たれるものはない。山毛櫟の大木は根が曲がっているが、根が吸い上げる力は十分。力が噴くという。豪快ともいいたい雪解け。「根開き」の「根」とは根の國の根を思われる。そんなことに気付き、雪解けにより根の国が開かれるという着想に心躍る思いだ。

舍利弗の首傾げをり春の奈良 伊藤木公

「舍利弗多羅」の略。釈迦の十大弟子の一人。舍利子。最も知恵がすぐれた弟子。その智者にもなにかわからないことがあるものか、首を傾げて。そんな仏像がある。さりげなさが「春の奈良」とのしせんな懐かしい明るさに相応しい。早くから高山の斗南子門下として注目されながら、ようやく代表句を得た感じの一句で、いよいよ活躍が愉しみ。ミモザがけむるように咲く頃。意欲が感じられる。

いまだからわらつていへる桜餅 浜 智子

日常生活ではこんなことが多い。そのときは前後左右一セントも動きがとれない状況。時が経つて、ことがなんとか目途がついてみると、「わらつていへる」ことになった。桜餅を食べながら茶呑み話の話題にも。やさしい言い方により緊張からやすらぎへの経過が十分に手にとるようにわかる。

早春の感情的な温度計 島形英美子

体温計でなく温度計なのが近年の陽気の不安定さを捉えておもしろい。「感情的な」とはたしかに早春の気候をあらわす。寒暖の差が著しい。世の中も感情的にいらいらする人が多くなつた。大国の大統領に多いけれど、これは気候変動のためではない。所得格差が大きく、資本主義経済末期の不公平さが募っていることにもよう。ブッシュという先が見えない政治家が宗教対立の種を蒔いた失敗から、世界は泥沼の混乱状況におちいつている。自分の感情をいかに制御するか。掲句のおもしろさから話が拡がってしまった。四十代の女性作者。

干拓地四月の雪の氣怠さう 高橋 龍治

秋田在住。みちのく秋田は、同じ東北でも、青森とも岩手とも違う顔をもつ。四月に雪が降る。春の雪ときれいな言いでなく干拓地の四月に気付かせる言い方がいい。「氣怠さ

吾から吾の少しずれるさくらどき 小熊 里利 霜柱なせか根拠のない自信 小松 市子

私たちにはつねに、他者との調和をとりながら生きている。そのときに、自分は「少しずれ」でいるなと思うのは、だれでもあること。「少しずれ」という感覚は、かなり強く思つたのである。お花見ではしやぎすぎたものか。可笑しい。

桃の花旅の荷物に児の御虎子 長尾裕美子

車で移動する旅か。桃が咲く春だけなわの時期の家族旅行詠。「児の御虎子」がおもしろい。この漢字をあてる点への着目にもセンスのよさを感じる。小さな子ども愛用のおまる。そこへしばらく跨らないと出ない。子にとっては大人のトイレではダメ。いきおい子どもを中心の暮しには、おまるも大事な調度品。明るい季節感を背景に、旅行好きの一家が目に浮かび、愉快い作。

今月の秀句

他に推薦候補作を掲げておきたい。

トラクターの肩身のせまき春の道 大窪 嘉幸 吾が終は猛者であるべし雪解川 高橋 洋子 花びらの陰は青めきたりけり 百瀬 政子

草が萌え、歩くのに気分がいい畠道をトラクターでがたがた運転してゆくのは「肩身」が狭いと思う。良心的な人だ。今あるを感謝の気持笹起きる 飯田 都子 春先の雪解のさま「笹起きる」を上手に生かした。粘り強い作者の体を張るような生き方は尊い。

彈傷の深き磯墓節祭 真榮城いさを 身のみ花陰や木魂吸ひ込む深く深く 小泉 千波 二人して畠ぶらりんや三月尽 加藤 律子 桜吹雪手首細しと握まれし 浦田 康子 螢や居るだけでいい体とよ 金井 光 賊哀しき海の泪とも 樋上 照男

う」がよく働く。湿った日本海側の四月の雪。地貌の句。

啓蟄や湯槽にあまた肩林檎 菅原砂登子

岩手の啓蟄の頃。ぼくぼく、あるいはしなしなした半分腐りかけた肩林檎を風呂に入れ、林檎風呂に入る。「肩林檎」とは信州でもよくいう。切ない言い方だ。ズバリ明快にいつたことで、春先の身辺整理をしている暮しが見えるようだ。

喰積や七十年前吾ありき 住 斗南子

九十三歳の飛騨高山の大老。二十歳の青春を正月の喰積から回想した。高岡高商の学生時代か。終戦直後。喰積などない、余裕のない頃。しかし、年齢だけは先がたっぷりあった。若き日をきのうのように思う。思い出は貴重だ。

春蘭や頑張らずとも諦めず 若槻 竹造

春蘭の矜持をもって、「頑張らずとも諦め」ないで続ける心構えがいい。続けるのが才能。諦めないで続けることで見えてくるものがある。平凡の先にちょっぴり非凡が見える。それを擱んでほしい。春蘭の品格はすばらしい。